

(h)

英語・小論文

試験科目	ページ	解答用紙枚数	時間	
英語 〔コミュニケーション英語Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・ 英語表現Ⅰ・英語表現Ⅱ〕 小論文	から1科目	1~4 5~15	2枚 1枚	70分 90分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。
- この問題冊子は15ページある。印刷不鮮明の箇所などがある場合には監督者に申し出ること。
- あらかじめ届け出た試験科目(英語、小論文の内の1科目)を解答すること。
- 解答はすべて別紙の解答用紙に記入すること。
- 解答用紙の指定欄には必ず受験番号を記入すること。
- 解答用紙の評点欄には何も記入しないこと。
- 英語の解答用紙の右下にある破線枠内には何も記入しないこと。
- 解答用紙は持ち帰らないこと。

英語

I 次の英文を読み、下の設問(1)~(6)に日本語で答えなさい。

If nations are significant in the interpretation and construction of the processes of internationalization and globalization, so too are individuals. One scholar argues that the influences of globalization can only exist if people “take them into their lives.” Of course, the influences of globalization exist independently of individuals, but they can exist only as influences if people are conscious of them.

This leads to the question of identities. Globalization as “the intensification of consciousness of the world as a whole” affects the individual’s ways of seeing and thinking about the world and consequently the individual’s identities in the world. Identities are constructed throughout life as the individual seeks to situate¹ him/herself in particular social and cultural groups, which extend to the “imagined communities” of the nation and the world. Internationalization and globalization are thus just as much individual as transnational² processes. It is only through engagement on the part of the individual that globalization and internationalization as “a state of mind” or as an essential part of people’s identities can be achieved.

In making this statement, two points need to be emphasized. The first is that identities are not fixed, but are constantly being modified and reconstructed. The second point is that the individual has many identities. Sometimes these identities may clash³, but it is more often the case that the individual is at ease⁴ with a variety of identities. As another scholar remarks, “The concept of a single, exclusive, and unchanging ethnic⁵ or cultural or other identity is a dangerous piece of brainwashing. Human mental identities are not like shoes, of which we can only wear one pair at a time.”

This is a particularly important point in discussions of internationalization and globalization, as these forces are often seen to threaten existing national, cultural, and ethnic identities. The implication⁶ of this point is that it is quite possible for the individual to construct identity as a member of the world—a likely outcome of globalization as “a state of mind”—without “losing” any existing identities.

[Adapted from Nelly P. Stromquist and Karen Monkman (2000), *Globalization and Education: Integration and Contestation across Cultures*]

- [注]
- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1. situate : 位置づける | 2. transnational : 国家(民族)を超えた |
| 3. clash : 衝突する | 4. be at ease : 安心する, 落ちつく |
| 5. ethnic : 民族の, 民族的な | |
| 6. implication : 含意, 含み, 言外の意味 | |

[設問]

- (1) グローバリゼーションの影響が(影響として)存在し得る場合について筆者はふた通りの仕方で表現しています。それらがどんな場合なのかを, 代名詞が指し示すものを明らかにしながら, 述べなさい。
- (2) 「全体としての世界という意識の強化」としてのグローバリゼーションは, どのようなはたらきをしますか。
- (3) 個人の側での積極的関与(engagement)によって何が可能ですか。
- (4) 下線部(a)の具体的な内容を書きなさい。
- (5) ある学者によれば, 何が危険な洗脳なのですか。
- (6) 下線部(b)を日本語にしなさい。

II 次の(1)~(5)の空所()に最も適当な英語の単語(1語)を入れて、対話の意

味が通じるようにしなさい。

(1) A: Do you () if I sit here?

B: Of course not.

(2) A: I've been working here for five years, so I'm used to () care of elderly people.

B: I know. They completely trust you now.

(3) A: Did you watch the drama on TV last night?

B: Yes. I think it was () of a comedy than a tragedy.

(4) A: You should not look () on poor people.

B: You are right. My father always tells me that.

(5) A: The party tonight will be a big one, won't it?

B: Indeed. So many guests are already arriving one () another.

III 次の(1)~(5)が正しい英文になるように、それぞれの()の中の単語を並べかえなさい。解答用紙には()内のみ記入すること。

- (1) She is (artist, ever, as, an, great, as) lived.
- (2) The bag is (to, one, carry, too, with, heavy) hand.
- (3) If (for, had, your, not, it, been) advice, I could not have finished the research project.
- (4) If you (with, come, a, to, up, happen) better idea, please let us know.
- (5) Tom has quite (lost, few, on, civilizations, a, videos).

IV 次の2つの英語の質問から1つ選び、解答用紙の()に選択した質問の番号を記入のうえ、100語程度の英語で自分の考えを書きなさい。(How are you? は3語と数えます。)

- (1) What can we do to promote recycling?
- (2) Which do you prefer, studying in the library or at home?

小論文

以下の資料は、オデッド・ガローの著書、柴田裕之監訳、森内薰訳『格差の起源：なぜ人類は繁栄し、不平等が生まれたのか』(NHK出版、2022年)からの抜粋である。これを読んで、次の設問すべてに答えなさい。

問Ⅰ 著者が述べているマルサスの考えについて 600 字以内で要約しなさい。

問Ⅱ 資料の最後で著者は「人類はどのようにして、マルサス説が想定している力の支配からついに抜け出すことができたのだろうか？」と問うている。マルサス説が想定していない世界はどのようなものか、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

解答は、解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答にあたっては、解答用紙の1マスを1字に使い、句読点、引用符、カッコなどはいずれも1字として扱う。ただし、算用数字およびアルファベットは1マス2字とする。

＜資料＞

18世紀の牧師トマス・マルサスは、イギリスのエリート階級の裕福な家庭に育つた。学者として影響力ももっていた彼は、^{けいもう}啓蒙時代の指導的人物であるウィリアム・ゴドワインやニコラ・ド・コンドルセといった当時の思想家たちのユートピア的 idealism を批判した。それらの思想家は、人類の進路を、理想の社会へと向かう必然の進歩の道として思い描いていた。それを浅はかだと感じたマルサスは、1798年に『人口論』を出版し、当時主流だったそうしたユートピア的 idealism に深い疑念を示した。マルサスは、人類がたとえどれだけ食糧の生産性を上げても、結局その成果は人口の増加によって帳消しになるため、長期的に見れば人類はけっして繁栄できないという悲観的な説を打ち出した。

マルサスの考えは、同時代の人に大きな影響を与えた。当時の著名な政治経済学者のなかには、デイヴィッド・リカードやジョン・ステュアート・ミルなど、マルサスの主張に深く感化された人がいた。一方、カール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスは、階級制度が窮乏の蔓延に関わっていることをマルサスが無視していると、厳しく非難した。逆に、進化論の生みの親であるチャールズ・ダーウィンとアルフレッド・ラッセル・ウォレスは、これまた大きな波紋を呼ぶことになる彼ら自身の説を練り上げるうえで、マルサスの『人口論』に決定的な影響を受けたことを認めている。

振り返ってみると、マルサスの記述は過去の世界についてはすべて的確だった。だが、人類の未来に関する彼の悲観的な予言は、やがてまったくの誤りであることが判明する。

産業革命以前のある村で、住民が鉄製の犁^{すき}を使って小麦を以前より効率よく栽培する方法を工夫し、パンの生産能力がぐんと高まったとしよう。当初は村民の食事が改善し、余剰食糧の一部を売ることで、生活水準は向上するだろう。食糧が豊富なおかげで、仕事量を減らして余暇を楽しむことさえできるかもしれない。しかし、マルサスはその先が肝心だと論じた。余剰食糧があるおかげで元気に成長する子どもが増え、村の人口は時とともに増加するだろう。ところが、村で小麦栽培に使える土地にはどうしても限りがあるため、人口が増えるにつれて1人当たりのパンの割り当ては

徐々に減る。いったん向上した生活水準は落ち始め、村民1人当たりのパンの量が当初の水準に戻った時点で、ようやく下げ止まる。技術の進歩によって集団は大きくなるが、残念ながら、長期的には豊かにはなれないということだ。

あらゆる生物が、この罠にはまってきた。ある島にオオカミの群れがいたとする。地球の寒冷化によって海面が下がり、別の島への陸橋が現れた。その島ではウサギの群れが平和に暮らしている。新たな狩り場に恵まれたオオカミたちは、獲物が増えることで生活水準が上がる。成獣に達する子オオカミが増え、個体数は爆発的に増加する。ところが、限られた数のウサギを餌食とするオオカミの数が増えるにつれて、彼らの暮らしは寒冷化以前の水準へと徐々に戻っていき、個体数は増加から停滞に転じる。手に入る食糧資源が増えても、長期的に見れば、オオカミたちの暮らしは楽にならないのだ。

マルサスの仮説は二つの根本的な前提にもとづいている。一つ目は、ある集団の食糧資源(農業生産高、漁獲量、狩猟採集の獲得量)が増えると、子どもの生存数も増す、というものだ。繁殖をよしとする生物学的・文化的・宗教的傾向があるうえ、栄養状態の改善に伴って子どもの死亡率が下がるからだ。二つ目の前提は、生活空間に限りがある場所ではどこでも、人口の増加は生活水準の低下を引き起こす、というものだ。マルサスによれば、人口の規模は必ず二つのメカニズムによって、入手可能な食糧資源に適応するという。人口の伸びが食糧生産力を上回った社会で、飢饉や病気、資源をめぐる戦争の多発によって、死亡率が上がる「積極的抑制」と、食糧が不足したときに晩婚や避妊によって出生率を低下させる「予防的抑制」だ。

産業革命以前の時代には、マルサス説が主張するように、技術の進歩は人口の増加をもたらしたもの、生活の豊かさにはつながらなかったのだろうか？ その時代に技術の水準と人口規模が現に正の相関関係にあったことは証拠から明らかだが、そのような関係があるだけでは、技術が人口に影響を与えたことにはならない。実際には、この時代の技術の進歩は部分的には、人口が増加した結果だった。社会が大きくなることで、発明をし得る人の数と彼らの発明に対する需要がともに増加したからだ。さらに、それとは別個の文化や制度や環境の要因が、技術の発展と人口の増加の両方を助け、結果的に両者のあいだに正の相関を生じさせた可能性もある。要するに、この相関そのものは、マルサス説が想定している力が働いている証拠にはならぬ

いのだ。

幸いにも農業革命は、マルサス説の妥当性を検証する興味深い手段を私たちに提供してくれる。ジャレド・ダイアモンドの説得力に富む主張にあるように、農業革命を早く経験した地域が当時のほかの地域よりも技術面で先行し、その優位が何千年も持続したことは、証拠によってしっかりと裏づけられている。したがって、ある地域が農業革命を経験した時期がわかれれば(あるいは、ある地域で飼育や栽培が可能な動植物の種類の数がわかれれば)、その地域の技術的進歩の水準を推測できる。言い換れば、どの時点を選んでも、農業革命を早く経験した地域ほど、技術の進歩の水準が高いことが見込まれる。だから、ほかの条件がすべて同じならば、ある地域が農業革命を早く経験し、かつ人口が多かったり豊かだったりしたら、その人口の多さや豊かさは技術的進歩の水準が高かったことが原因であると自信をもって結論できるのだ。

この検証法を使えば、産業革命以前の時代はマルサスの言うメカニズムが作用していたことが実際に確認できる。たとえば西暦1500年には、農業革命が始まった時期にもとづいて推測した技術水準が高いほど、現に人口密度も高かったが、1人当たりの所得への影響はごくわずかだった。

また、別の証拠からは、肥沃な土壌も人口密度の上昇を促したもの、生活水準の向上にはつながらなかったことがわかる。さらに、もっと古い時代を同じレンズを通して眺めると、驚くほど一貫したパターンが浮かび上がる。技術の進歩と土地の生産性の高さはたいてい人口増加を招くだけで、生活の豊かさにはつながらなかったのだ。これは、産業革命以前には、世界中の人がおおむね同じような生活水準で暮らしていたことを意味する。

マルサスのメカニズムは、それを考えに入れないと理解に苦しむような歴史上の主要な出来事の根本的な原因に光を投げかけてくれる。一見すると頭を抱えたくなるような謎の一つに、次のようなものがある。初期の農耕社会の人骨には健康や豊かさの向上の跡が見られず、何千年も前の狩猟採集民に比べてむしろ生活水準の低下が窺えるのだ。狩猟採集民のほうが明らかに長生きで、食生活が豊かで、仕事も楽だし、感染症も少なかった。それではなぜ初期の農民や羊飼いたちは、比較的豊かで優れていた狩猟採集生活を捨てたのだろうか？

前述のとおり、アフリカから出て新しい居住環境に移った先史時代の人類は、豊かな食糧資源を新たに手にし、生活水準を下げずに急速に数を増やすことができたはずだ。それでも結局はマルサスのメカニズムが働き、限りある野生動植物を奪いあう人の数が増えたために、いったん獲得した豊かさは相殺されただろう。道具や技術が進歩したにもかかわらず、暮らしは元の生存水準へと徐々に戻ったに違いない。それどころか、過剰な人口増によって生存水準さえも下回り、崩壊の可能性に直面する社会もあった。

こうした現象がとりわけ深刻だったのは、ホモ・サピエンス以前の古代人類が一度も住んだことがなく、動物たちが人類の脅威に適応していなかった地域だ。たとえば、オセアニアやアメリカ大陸では、優れた武器を手にホモ・サピエンスが到來すると狩猟が盛んに行われ、やがて大半の大型哺乳類は絶滅し、次第に多くの部族が、急速に減っていく食糧資源をめぐって争う羽目になった。

人口が急増し、過剰な資源採取についには崩壊につながるという現象の極端で悲惨な例が、13世紀初めに太平洋のイースター島に移り住んだポリネシア人の孤絶した部族だ。住みついてから400年近いあいだ、豊かな植生と漁場に恵まれたイースター島の人口はぐんぐん増えた。文明が栄え、最大10メートルの高さがある、あの有名な堂々たるモアイ像群が造られた。ところが結局、人口の増加は島の脆弱な生態系にとって次第に重荷になった。18世紀に入るころには、イースター島の鳥たちは姿を消し、森林は破壊され、漁船の製造や維持ができなくなっていた。この切迫した状況のせいでたびたび内紛が起り、人口は80%近くも減少した。同様の生態学上の災害は、ジャレド・ダイアモンドが著書『文明崩壊』で述べているように、南太平洋のピトケアン諸島の人々や、今日のアメリカ南西部に当たる地域で暮らしていたアメリカ先住民、中央アメリカのマヤ文明の人々、グリーンランドに渡ったスカンディナヴィアの諸部族のあいだでも起こった。

肥沃な三日月地帯の狩猟採集社会は、今から1万2000年近く前に同様の圧力を経験した。豊富な食糧と技術の向上によって人口が増えたため、狩猟採集による1人当たりの入手可能な食糧が徐々に減り、一時的に上向いた暮らしはやがて生存水準へと戻っていった。それでもなお、飼育栽培可能な動植物種が豊かである肥沃な三日月地帯の際立った生物多様性のおかげで、この地の社会はイースター島民にはほぼ不可能

だった別の生存方法を選ぶことができた。それが、農耕だ。気候条件も助けになつた。今から1万1500年ほど前に最後の氷河期が終わると、一帯の土地は前よりも農耕に適するようになり、気候の変動性と季節性も増した。こうして農耕は、たとえそれに伴う食生活の質で劣ろうと、狩猟採集よりも確実な食糧生産方法になった。狩猟採集は豊かな食物をもたらすものの、未来の予測が困難な先細りの方法だったからだ。

肥沃な三日月地帯では農耕に依存できたおかげで、イースター島でのちに文明崩壊を招いたような生態系の危機を回避し、以前よりはるかに大きな人口を支えることが可能になった。事実、いくつかの情報によれば、農耕や牧畜では狩猟採集と比べて単位面積当たりで100倍近い農民や牧畜民を養えたという。最後にはもちろん、農耕社会の人口規模は新たな高い水準で落ち着くことになるが、このときには暮らしへ生存水準へと逆戻りしていたため、この地の人口密度がまだ低かった何千年前の狩猟採集民の生活水準を、じつは大きく下回ったのだ。それでも、もっと近い祖先の狩猟採集民の生活水準と比べると、農耕への移行はまさしく理に適っていて、必然でさえあつたかもしれない、じつのところ、それはけっして生活の質の低下ではなかつたのだ。興味深いことに、はるか昔の狩猟採集民の豊かな暮らしから人口が密集した農耕民の貧しい暮らしへの転換は、世界各地の複数の文化に共通する「失われた楽園」にまつわる神話の起源になった可能性もある。

農耕社会は人口の増大と早くからの技術進歩によって、残っていた狩猟採集民を打ち負かし、ついに農業は地球上の広い範囲で主流の座に就いた。新たな時代はすでに幕を開け、もう後戻りはできなかつた。

マルサスの強力なメカニズムは、農業革命後の人口変動の際にも作用していたことが見てとれる。引き金を引いたのは、生態系や疫病や制度に関わる激変だ。

人類史上屈指の甚大な被害をもたらした出来事が、黒死病(腺ペスト)のパンデミックだった。黒死病は、14世紀に中国で最初に発生し、その後、モンゴルの軍隊や商人とともにシルクロードに沿つて西へと広まり、クリミア半島に達した。そこからさらに商船で旅を続け、1347年にシチリア島の都市メッシーナとフランスのマルセイユに行き着いたのち、ヨーロッパ大陸全土に一気に広がつた。黒死病は1347~52年

に、ヨーロッパの人口の 40 % にのぼる死者を出した。人口密度の高い地域では特に致命的だった。ほんの数年のうちに、パリ、フィレンツェ、ロンドン、ハンブルクなど多くの都市で、住民の半数以上が命を落とした。

生き残った人々も多くの親族や友人を黒死病で失い、癒えることのない心の傷を負つただろうが、この疫病は小麦畑や製粉機には害を及ぼさなかった。だから、ヨーロッパの農民は大きな痛手を受けたあとでも仕事を再開することができた。そして、自分の労働力に対する需要が急上昇していることに気づいた。農業の人手不足は切実で、平均的な労働者はほどなく黒死病の流行前よりも収入が増え、労働条件も改善した。

1345～1500 年にイングランドでは人口が 540 万人からわずか 250 万人にまで激減する一方、実質収入は 2 倍以上に増えた。こうした収入の増加が生活水準を押し上げた結果、出生率は上昇して死亡率は低下し、イングランドの人口はゆっくりと回復に向かった。しかしマルサスのメカニズムに従って、人口増加は最終的には平均収入の下落につながり、300 年も経たないうちに人口も収入も黒死病の前の水準に戻った。

重大な人口変動は、1492～1504 年にクリストファー・コロンブスがアメリカ大陸へ数度航海したあとにも起こった。アメリカ大陸にはカカオ豆、トウモロコシ、ジャガイモ、タバコ、トマトなど、ヨーロッパ人には馴染みのない作物が豊富にあり、それらの作物が船でヨーロッパへ運ばれるようになった。逆に、バナナ、コーヒー豆、サトウキビ、小麦、大麦、稻などの作物が、初めてアメリカ大陸にもたらされた。

ジャガイモは 1570 年ごろにヨーロッパに伝わり、ほどなくヨーロッパの料理に欠かせない食材になった。ことに大きな影響を受けたのがアイルランドで、貧しい自家消費農家のあいだでジャガイモ栽培は広く普及した。

ジャガイモはアイルランドの土壌と気候にとりわけ適しており、農民の収入は短期的には増加し、時には新たに家畜を買う余裕さえできた。ジャガイモを栽培し始めた当時の農民は、カロリー摂取量も生活の質も大幅に上昇した。

だが、マルサス説のとおり、こうした改善は長続きしない運命にあった。ジャガイモが導入されたあと、1600 年には約 140 万人だったアイルランドの人口は 1841 年には 820 万人にまで膨れ上がったが、暮らしは生存水準に近いままだった。それどころか、状況は以前よりも悪化することになる。1801～45 年には、当時アイルランドを

統治していたイギリスの多くの議会委員会でこの問題が議論された。おおかたの結論は、急速な人口の増加と生活水準の落ち込みによりアイルランドが惨事の手前まで来ているというものだった。このころには、アイルランド人の多くが、生き延びるための食糧として全面的にジャガイモに頼っていたからだ。なおさら悪いことに、人々は単一品種のジャガイモに依存していた。

1844年、アイルランドの新聞は、アメリカで新たな菌類(疫病菌)がジャガイモに甚大な被害を及ぼしていると報じ始めた。やがて、その菌はアメリカの貨物船によってヨーロッパ各地の港に運ばれ、畑に広がり、ベルギー、イングランド南部、フランス、アイルランド、オランダの作物に大打撃を与えた。アイルランドのジャガイモは1845年には半分近くが、1846年には4分の3が枯れたと推定されている。ジャガイモが多様性を欠いていたため、アイルランドの農民には、壊滅的被害に遭った品種に代わるもののがなかった。イギリス政府からの有益な介入や救済がなかったので(そもそも、単一の作物への依存を奨励したのがイギリス政府の政策だった)、大規模な飢饉の発生は避けられなくなり、アイルランド大飢饉(1845~49年)では、主に貧しい農村地帯で約100万もの死者が出た。飢餓や発疹チフスや、栄養状態が良ければ回避できたであろう病気が原因だった。また、100万を超える人がグレートブリテン島や北アメリカに移住した。一部の地域では人口の30%以上が失われた。住民が一人もいなくなってしまった村も、いくつもあった。こうして3世紀のあいだに、優れた作物の導入とその後の大惨事は人口の増加とそれに続く大激減を引き起こしたが、長期的に見れば、生活水準にはほとんど影響が出なかった。

新世界の作物を取り入れたのは、ヨーロッパの人々だけではなかった。中国では、ジャガイモよりも自国の土壤に適したサツマイモやトウモロコシが新世界から取り入れられ、栽培された。トウモロコシは16世紀半ばに三つのルートで中国に伝わった。北からシルクロード経由で中央アジアを横断して甘^{かんしゅく}粛省へというルート、南西からインドとビルマ経由で雲南省へというルート、そして南東から、福建^{ふっけん}省の太平洋岸沿いで交易をしていたポルトガルの商船に運ばれて伝わったルートだ。当初、トウモロコシはかなりゆっくり広まり、栽培はこれらの三省に限られていた。だが18世紀半ばには広く普及し、20世紀に入るころには中国全土で欠かせない食物になっていた。トウモロコシの導入は中国の農業生産高に大きな影響を与えたので、のちにこ

の国の研究者たちに、中国の二度目の「農業革命」と名づけられた。

多くの科学分野では、研究者は対照実験によって実験群(治療群)と対照群への影響を比較測定し、新薬やワクチンなどの特定の要因が及ぼす影響を判定できる。だが、歴史的な出来事の場合、時計を巻き戻して一部の人だけを特定の影響にさらし、時間とともにどのような結果につながるかを調べることはできない。それでも、「歴史の準自然実験」という方法を使うことはできる。つまり、実験室と同じような状況を呈している歴史的事象を探し、特定の要因や出来事にさらされた「実験群」とさらされていない「対照群」を比較することで、そうした要因や出来事がもたらす影響を推測するのだ。トウモロコシは異なる時期に中国の異なる省に伝來したので、こうした「歴史の準自然実験」の対象となり、国同士のあいだではなく一つの国の中でマルサス説を検証することができる。

マルサス説のとおりなら、中国で早くトウモロコシを導入した省は長期的に見れば、あとから導入した省よりも人口密度は高くなるが、1人当たりの所得や経済発展の度合いで優ることはおそらくない。ただし、地域ごとの人口密度と生活水準を単純に比較するだけでは意味がない。早くトウモロコシ栽培を導入した省にはあとから導入した省にはない重要な特徴がほかにもあって、それらも人口密度や生活水準に影響を及ぼした可能性があるからだ。実際、当時は中国全体が、ほかにもいくつか大きな変化を経験しており、それがトウモロコシの伝来とは別個に、人口密度と生活水準の地域差に影響したかもしれない。

そこで研究者たちは、単に人口密度や生活水準を比較するのではなく、最初にトウモロコシを導入した三つの省の人口密度と経済的繁栄の長期的变化と、ずっとあとに導入した省でのそれらの変化とを比べた。人口密度と経済的繁栄の実際の水準の差ではなく、「変化の差」を比較することで、混乱を招く可能性のある要因を取り除くことができる。すると、はたしてマルサスの仮説どおり、早くトウモロコシ栽培を導入した三つの省は1776～1910年に、ほかの省よりも人口密度の増加が10%多かったものの、収入水準には目立った影響は見られなかった。全体として、この期間に中国が経験した人口増加の合計の約5分の1は、トウモロコシの導入が原因だと考えられる。

このように、マルサス時代には余剰状態も欠乏状態も長続きしなかったのは明らか

だ。新たな作物や技術の導入は人口増加率を上げるので、経済の繁栄にはつながりにくかった。一方、生態学上の災害は飢饉や病気や戦争を通して人口を減少させるので、こうした災害を原因とする長期的な経済の荒廃は最終的には回避された。こうして、繁栄と荒廃の合間で停滞する「経済の氷河期」が、いやとうなく続いたのだった。

農業革命も、文化や制度、科学や技術の一連の大躍進も、人々の生活水準の経済的尺度(1人当たりの所得)と生物学的尺度(平均寿命)のどちらに対しても、取り立てて言うほどの影響を長期にわたって及ぼすことはなかった。他の生き物たちと同様に、人類はその歴史の大半を通して困窮の罠に捕らわれ、生存水準に近い暮らしを余儀なくされてきた。

さまざまな文明で、1人当たりの所得や技能をもたない労働者の収入は何千年ものあいだ、地域差はあるもののごく狭い範囲で上下していた。具体的には、1労働日当たりの収入は、3000年以前のバビロンでは小麦で7キログラム、アッシリア帝国では5キロ、2000年以前のアテナイでは11~15キロ、ローマ帝国支配下のエジプトでは4キロに、それぞれ相当したと推定されている。実際、産業革命の直前でさえ、西ヨーロッパ諸国の労働者の収入はこの狭い範囲にとどまっており、アムステルダムで小麦10キロ、パリでは5キロ、マドリッドやナポリなどイタリアとスペインのあちこちの都市では3~4キロだった。

さらに、過去2万年間のさまざまな部族や文明が残した人骨は、地域や時代による差はあるものの、出生時の平均余命(平均寿命)の変動がじつに狭い幅で変動していたことを示している。北アフリカや肥沃な三日月地帯の中石器時代の遺跡で発見された人骨からは、平均寿命が30年弱だったと推定される。その後の農業革命期に、平均寿命は一部の地域では縮んだが、大半の地域では目立った変化はなかった。具体的には、4000~1万年前の農業革命初期の墓地遺跡から発掘された人骨は、平均寿命がチャタル・ヒュユク(トルコ)とネア・ニコメディア(ギリシア)ではおよそ30~35年、ヒロキティア(キプロス)では20年、カラタシュ(トルコ)近郊とレルネー(ギリシア)近郊では30年だったことを示している。2500年前にはアテナイとコリントスで平均寿命は約40年に達したが、ローマ帝国の墓石からは、死亡年齢がやはり20~30歳だったことがわかる。もっと新しい時代の証拠を見ると、16世紀半ばから19世紀

にかけてのイングランドの平均寿命は 30 年から 40 年のあいだで上下しており、産業革命以前のフランスやスウェーデン、フィンランドでも同じような数値が記録されている。

ホモ・サピエンスの出現から 30 万年近く、1 人当たりの所得が生存に最低限必要な水準を超えることはほとんどなく、疫病や飢饉が多発し、乳児の 4 人に 1 人は 1 歳の誕生日を迎えられず、多くの女性が出産時に命を落とし、平均寿命が 40 年を超えるのはまれだった。

ところがその後、すでに述べたように、西ヨーロッパと北アメリカではさまざまな社会層で突如、生活水準が急速に未曾有の向上を始め、続いて世界のほかの地域でも同様の現象が起きた。驚くべきことに、19 世紀の初め以降、長かったマルサス時代に比べればまさに一瞬のうちに、世界全体で 1 人当たりの所得は 14 倍に急上昇し、平均寿命は 2 倍以上になったのだ。

人類はどのようにして、マルサス説が想定している力の支配からついに抜け出すことができたのだろうか？

(出題にあたっては小見出しを省略し、一部表記を改めた)

令和6年度入学試験 小論文「出題意図」

(入試情報公開用)

経済経営学類 一般選抜 後期日程

素材として、オデッド・ガロー著、柴田裕之監訳、森内薰訳『格差の起源 なぜ人類は繁栄し、不平等が生まれたのか』（NHK出版、2022年）のうち、第2章「停滞の時代」（39頁から56頁まで）を与えたうえで、問Iでは資料の要約を求め、問IIでは著者の見解を踏まえた上で解答者の考えがどうなるかを示させ、これらの問を通じて、解答者の読解力、知識活用力、表現力等を総合的に見た。